

法人モデル：CRDモデル3・CorpSG・CorpSB

個人事業主モデル：CRDモデル4・PropS

2025年度定期検証に関する評価報告書

【 概要版 】



2026年 4月 2日

## はじめに

当協会では、CRDモデルの品質維持・管理のため、定期的にその精度を検証しております。今年度についても、検証時直近までに蓄積された新たな決算書・申告書及びデフォルト情報を用いて、CRDモデルの品質に係る定期検証を行うこととし、その妥当性、適切性及び検証結果に対する客観的な評価を、CRDモデル第三者評価委員会へ要請しました。

今般、同委員会の山下智志委員長から、2025年度におけるCRDモデルの品質に係る定期検証に関する評価報告書が提出されましたので、その報告書概要版を皆様へ公開いたします。

2026年4月2日  
一般社団法人CRD協会  
代表理事会長 柳原 良太

# 1. 検証の内容及び方法について

- 検証時直近までにCRDに蓄積された決算書・申告書情報及びデフォルト情報を用いて検証用データセットを整備し、そのデータ件数及び実績DF率※の動向からデータ内容の確認を行う。
- 当該検証用データセットを用いて各CRDモデルについて予測精度の検証を実施する。その主要な検証実施内容は以下に示すとおり。
  - ✓ 順位精度の確認  
モデルのスコアリング結果である推計PD※（一部の検証では推計PDにより定義される保証料率区分）とデフォルトフラグを用い、決算年・申告年毎にAR値を算出することで順位精度を確認する。
  - ✓ 推計PDと実績DF率の一致性の確認  
推計PDをベースとして決算年・申告年毎にデータを10区分したうえで、区分毎の推計PDの平均値と実績DF率を比較し、一致状況を確認する。
    - なお、CRDモデルはその構造上、マクロ経済要因や政策動向等によって推計PDと実績DF率の水準の乖離が発生するものであり、この一致性の検証においては状況の確認と周知に留める取扱いとする。

※ 本資料では、推計デフォルト確率を推計PD、また、実績デフォルト率を実績DF率と表記することとする。

## 2. 委員会での評価結果概要（1/5）

- 法人モデルについては「CRDモデル3」「CorpSG」「CorpSB」を対象に精度検証を行った。
  - 検証に利用したデータセットについては、検証の実施に必要なデータ数は十分に蓄積されており問題ないことを確認した。

### ◆ 「CRDモデル3」

- ✓ CRDモデル3【期間1年推計PD】の順位精度を示すAR値は、2020年に従前の水準からは低下した※が、2021年はやや上昇し、それ以降も概ね横ばいの水準で推移している。

※ ここで確認されたAR値の低下は、主にCovid-19関連資金繰り支援策の影響によるもの。以降に記載の他のモデルにおいて同じく確認されるこの時期のAR値低下に関しても同様の要因。（なお、個人事業主モデルでは、対象データの申告年が12月締めであるため2019年から影響が見られる。）

- ✓ 推計PDと実績DF率の一致性については、2023年は信用リスクの高いグループにおいて実績DF率が推計PDを上回っている状況であり、実績DF率上昇の影響が反映されたものと見られる。
- ✓ CRDモデル3【期間3年推計PD】については、信用保証協会データに限定し、「代位弁済先」のみをデフォルトと定義して、信用保険・保証料の料率区分に関するAR値を計算した。AR値は、検証対象の全期間で期間3年推計PDとしては十分な水準を確保している。

## 2. 委員会での評価結果概要（2/5）

### ◆ 「CorpSG」

- ✓ CorpSG【期間1年推計PD】全体のAR値は、2019年に過去最高となったのち、2020年に比較的大きく低下し、以降も低下後の水準に留まっているが、今次検証対象の全期間で十分に高水準であり、モデル構築時の水準も上回っている。また、CorpSGのAR値は、全体だけでなく、全てのカテゴリ区分および決算年において、CRDモデル3のAR値を明確に上回っている。
- ✓ 推計PDと実績DF率の一致性については、2023年は信用リスクの高いグループにおいて実績DF率が推計PDを上回っている状況であり、実績DF率上昇の影響が反映されたものと見られる。
- ✓ CorpSG【期間3年推計PD】については、「業歴を考慮するパターン」と「業歴を考慮しないパターン」で推計PDの算出が可能であるが、いずれのパターンでも、AR値はCRDモデル3の期間3年推計PDにおけるAR値を明確に上回る水準となった。

### ◆ 「CorpSB」

- ✓ CorpSB【期間1年推計PD】のAR値は、今次検証対象の全期間において、申し分のない高水準を安定的に維持している。
- ✓ 推計PDと実績DF率の一致性については、2023年は信用リスクの高いグループにおいて実績DF率が推計PDを上回っている状況であり、実績DF率上昇の影響が反映されたものと見られる。

## 2. 委員会での評価結果概要 (3/5)

### ■ 法人モデル総括

- CRDモデル3は、信用保険・保証料の料率区分の決定に際し、その期間3年推計PDがこれまで利用されてきたモデルである。2005年6月のリリースから年数は経過しているものの、実用に足るデフォルト予測精度は十分維持されている。ただし、業歴の浅い先に対するAR値が比較的低水準である点については留意が必要と考える。
- CorpSGは、CRDモデル3の後継モデルとして、信用保険・保証料の料率区分の決定に際し、2026年4月期決算書より、その期間3年推計PDが利用されるモデルである。初回の検証を実施した2016年度以来、毎年の検証結果において、CRDモデル3対比で精度面の優位性が安定的に示されている。特に、売上高規模の小さい先や業歴の浅い先に対しては、精度の差が顕著である。
- 上述のとおり精度面の優位性は明白であることから、現状CRDモデル3を利用している会員に対しては、少なくとも、入力対象データが同一の財務項目である、後継モデルのCorpSGへ切り替えることを推奨する。
- CorpSBは、デフォルトの定義に「破綻懸念先」を加え、精度向上のために入力項目を拡張したうえで構築したモデルである。デフォルト定義は異なるものの、CRDモデル3やCorpSGと比較してより高い精度が示されている。今後において新たなクレジットスコアリングモデルの導入や切替えを検討する会員に対しては、特に精度面の向上を企図するものであれば、採用モデルの有力な候補対象の一つとして、CorpSBを加えることを推奨する。

## 2. 委員会での評価結果概要（4/5）

- 個人事業主モデルについては「CRDモデル4」「PropS」を対象に精度検証を行った。
  - 検証に利用したデータセットについては、モデル全体に対する検証の実施に必要なデータ数は十分に蓄積されており問題ないことを確認した。
- ◆ 「CRDモデル4」
  - ✓ CRDモデル4のAR値について、BSモデルでは、2020年にAR値の低下が見られたが、2022年以降は2019年以前の水準まで回復している。一方、PL1モデルでは、2022年以降、AR値の低下が見られる。また、PL2モデルでは、2019年に大きく低下したが、2020年以降は上昇傾向が見られ、PL1モデルのAR値の水準に迫ってきている。
  - ✓ 推計PDと実績DF率の一致性に関しては、足もとの実績DF率上昇傾向にもかかわらず、推計PDが実績DF率を大きく上回っている状況である。
  - ✓ 推定BSモデルでは、2019年、2020年とAR値の低下が見られたが、2023年は2018年以前の水準まで回復している。
- ◆ 「PropS」
  - ✓ PropS一般業種モデルのAR値は、BSモデルでは、2019年、2020年に低下が見られたが、2021年以降は回復傾向にある。一方、PLモデルでは、2019年に低下が見られたのち、2020年、2021年と反転上昇が見られたものの、未だ従前の水準には至っていない。
  - ✓ 推計PDと実績DF率の一致性に関しては、2022年は大きな乖離は見られず、CRDモデル4よりも高い一致性が示された。
  - ✓ 一般業種推定BSモデルでは、2019年にAR値が低下して以降その水準が継続していたが、2022年には上昇し、2023年もそこから横ばいで推移している。

## 2. 委員会での評価結果概要 (5/5)

### ■ 個人事業主モデル総括

- CRDモデル4は、信用保険・保証料の料率区分の決定に際し、原則そのBS総合モデルがこれまで利用されてきたモデルである。BSモデルについては、個人事業主を対象とする信用リスク評価モデルとしてはその順位精度に特段の問題は確認されない。一方、PL1モデル・PL2モデルでは、BS情報が無いことによるモデル評価の限界に留意した利用が求められる。「現金預金」「借入金」情報の適切な補完により、推定BSモデルを適用して運用するほうが望ましい。
- PropSは、CRDモデル4の後継モデルとして、信用保険・保証料の料率区分の決定に際し、2026年分申告書より、そのBSモデルの利用が想定されるモデルである。BSモデルについては、個人事業主を対象とする信用リスク評価モデルとしてはその順位精度に特段の問題は確認されない。また、モデル開発時からこれまでの検証期間において、2022年を除き、CRDモデル4対比で精度面の優位性が確認されている。一方、PLモデルでは、CRDモデル4同様に、BS情報が無いことによるモデル評価の限界に留意した利用が求められる。「現金預金」「借入金」情報の適切な補完により、推定BSモデルを適用して運用するほうが望ましい。
- 推計PDに関しては、CRDモデル4では実勢との乖離が明白に大きく過大推計となる点に使用上の留意が求められる一方、PropSでは大きな乖離は見られていない。また、上述のとおり、順位精度についてもPropSのほうが優位な傾向にある。以上を踏まえ、現状CRDモデル4を利用している会員に対しては、PropSへの切替え検討を行うことを推奨する。

# 「CRDモデル第三者評価委員会」委員

あらかわ けんいち  
荒川 研一

りそな銀行 金融イノベーション研究所 所長

いちかわ みつる  
市川 満

全国信用保証協会連合会 事務局長

こじょう いわお  
小城 巖

南都銀行 リスク統括部 信用リスク管理高度化室  
上席プランマネージャー

つだ ひろし  
津田 博史

同志社大学 理工学部 数理システム学科 教授

やました さとし  
山下 智志  
(委員長)

情報・システム研究機構 統計数理研究所 所長  
総合研究大学院大学 統計科学コース 教授

よしの なおゆき  
吉野 直行

慶應義塾大学 経済学部 名誉教授  
東京都立大学 経済経営学部 特任教授

(五十音順・敬称略、肩書は2026年3月末時点)